

令和 8 年度 鳥取県 英語教育改善プラン

【鳥取県が目指す小・中・高等学校で一貫した英語教育の姿】

目標

言語活動を通して英語 4 技能をバランスよく育成する
(小学校) **英語に慣れ親しみ、自分の考えや気持ちを英語で伝え合う力の育成**

■ 言語活動 ■ 指導と評価の一体化 □ 教師の英語力・指導力 ■ 校種間連携 □ ALTの参画 □ ICTの活用 □ AIの活用 □ その他
(パフォーマンステスト含む) (専科教員含む) (AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

①「言語活動を通した指導」を中心とした授業づくりが進められている。

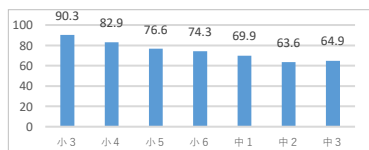
・授業の 50%以上言語活動を行っている
と回答した学校の割合 (%)

年度	第5学年	第6学年
R6	91.5	93.2
R7	92.4	94.0

・言語活動を通して、自分の考えや気持ちを英語で伝え合う力の育成を、指導上努力したと答えた学校の割合
(R6及びR7: **98.3%**)

②小中連携を行った学校が増加した。
(R6: 74.4%→R7: **85.5%**)

①「英語の学習が好き」と回答する児童の割合が学年が上がるにつれて下がる。



②「CAN-DOリスト」の活用を意識した学校は約半数である。(R7: **53.0%**)

③小中連携が全校実施に至らず、内容も単なる情報交換にとどまっている学校が多い。
(R7: **85.5%**)

※数値は学校教育実施状況調査及び県独自調査の結果参照

未だ改善が必要な点

2. 要因分析

①各種研修会等で言語活動を通して指導することの具体を伝えてきたことで、県内全域に「言語活動を通した指導」の考え方が浸透してきたことが考えられる。

②各種研修会等で小中連携の必要性を伝えるとともに、英語専科教員を中心に小中連携を推進することで、市町村教育委員会が独自に主催する協議会や研修会も増え、小中連携への意識が高まってきたことが考えられる。

①児童の興味・関心を引き出し、意欲を高める言語活動の質が十分でないこと、また、教員の英語力や指導力にも差があることが要因と考えられる。

②「CAN-DOリスト」の活用が十分になされず、単元末や年度末に何ができるようにすれば良いかを明確にした指導になっていないことが考えられる。

③小中連携における情報交換は促進されつつあるが、学びの連続性を意識した指導の必要性や具体についての理解が不十分であると考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

①①**児童の英語学習への意欲及びコミュニケーション能力の向上の推進**

・小学生のための1 DAYイングリッシュ (1日×2回×2会場)

→ALT等のネイティブスピーカーと英語を使ってコミュニケーションを図る場を創出

・外部試験(英検ESG)を活用した児童生徒の英語力向上事業

→年間を通じた学習指導と評価に使えるワークシートの活用と、児童の英語力の客観的指標に基づいた把握による指導の充実

・オンラインスピーキング補助事業

→オンライン英会話及びAI型英会話の導入に要する経費を支援

②①②③**教師の指導力向上の推進**

言語活動を通した指導の充実を図るため、各種研修会等を開催

・小学校英語専科教員等連絡協議会の開催 (2回)

・小学校英語専科教員訪問

→外国語担当指導主事等が県内の新規英語専科配置校を訪問し、授業参観及び事後協議を行い、授業改善と専科の活用を促進

・各種研修会(動画配信含)

小学校外国語研修 (英語専科等指導力向上研修を兼ねる)
教育課程研究集会

③**校種間連携の推進**

・小・中・高等学校の学びのつながりを見通した外国語の授業づくり研修会

→小・中・高等学校全ての校種の英語担当教員を対象とし、校種間の学びの連続性に関する実践発表や外部講師による講演やワークショップを実施
(英語専科等指導力向上研修を兼ねる)

④**教員の英語力向上**

→小学校教員採用試験において、英検準1級相当以上を有する者を第一次選考試験免除とする。

令和 8 年度 鳥取県 英語教育改善プラン

【鳥取県が目指す小・中・高等学校で一貫した英語教育の姿】言語活動を通して英語 4 技能をバランスよく育成する

(中学校) **自分の考えや気持ちを英語で伝え合う力の育成**

○CEFR A1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合 (R7: 50.0% ⇒ R8: 54.0%)

○授業における言語活動時間が50%以上の学校の割合 (R7: 69.5% ⇒ R8: 80.0%) ※県独自調査

○「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標を活用している学校の割合 (R7: 64.3% ⇒ R8: 70.0%) ※県独自調査

目標

■ 言語活動 ■ 指導と評価の一体化 □ 教師の英語力・指導力 ■ 校種間連携 □ ALTの参画 □ ICTの活用 □ AIの活用 □ その他
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

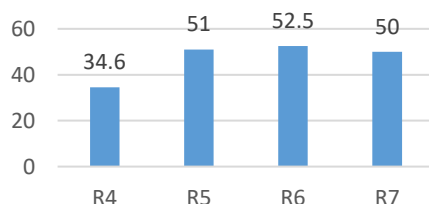
1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

①授業における言語活動時間が50%以上の学校の割合が増加した。
(R6:67.8%⇒R7:69.5%)

▲目標値(80%)には至っていない
②小中連携をおこなっている学校が増加した。
(R6:77.6%→R7:82.8%)

①CEFR A1以上の英語力を有する生徒の割合が令和5年度以降、国の基準を上回っていたが、令和7年度は若干下がった (R7:50.0%)



②「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標を意識した学校の割合に課題が見られる。(R7:64.3%)

※「①生徒の英語力」以外の数値は、県独自調査の結果による

未だ改善が必要な点

2. 要因分析

①①各学校への訪問支援や各種研修会等の開催により、県内全域において、「言語活動の実施」については、一定程度周知が図られた。しかし、言語活動時間が50%に満たない学校が約3割あることや、学校によって指導の在り方に差が見られることから、「言語活動を通じた指導」の具体についての理解が十分ではなく、実践につなげられていない学校が一定数あることが考えられる。

②市町村教育委員会が主体となって、中学校教員が小学校外国語の授業を行ったり、域内の外国語教育担当者対象の研修会を実施したりする等、学校種間のつながりを意識した取組が推進されつつある。

①令和5年度から全公立中学校3年生(義務教育学校9年生)を対象にした外部試験を実施しており、各学校で客観的指標を基にした生徒の英語力の見取りに活用されている。しかし、試験結果の分析や授業改善への活用が十分ではないことが考えられる。

②長期的な視点での英語力向上が単元構成や授業構成の考え方の理解が不十分であることが考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

①①生徒の英語力向上の推進

・外部試験を活用した生徒の英語力向上事業

→中学校3年生に4技能型、1・2年生に2技能型の英検IBAを実施。
生徒の英語力について経年での伸びや過年度との比較ができる「活用シート(学校用・生徒用)」(R6作成)を活用し、生徒の英語学習への意欲向上や指導改善を図る。

・AIを活用した英語教育強化事業

→英語の使用量増加や、個別最適な指導の充実のための生成AI等の活用の在り方について検証する。(モデル校設置)
研修会での成果発表、公開授業等により、県内に成果等を周知する。

・Tottori English Challenge Program2026

→中学生・高校生を対象とした3日間にわたるスピーキング力育成講座

・オンラインスピーキング補助事業

→オンライン英会話及びAI型英会話の導入に要する経費を支援

①②①②教師の指導力向上の推進

・中・義務教育学校外国語(英語)訪問

→学校の希望や各市町村教育委員会との協議の上、訪問校を調整し、外国語担当指導主事等が県内公立中学校を訪問し、授業参観や研修を行い、指導改善を個別に支援

・各種研修会(動画配信含)

教育課程研究集会
全国学力・学習状況調査を活用した授業づくり研修会

②学校種間連携の推進

・小・中・高等学校の学びのつながりを見通した外国語の授業づくり研修会

→小・中・高等学校全ての校種の英語担当教員を対象とし、校種間の学びの連続性に関する外部講師による講演やワークショップを実施

令和 8 年度 鳥取県 英語教育改善プラン

【鳥取県が目指す小・中・高等学校で一貫した英語教育の姿】言語活動を通して英語 4 技能をバランスよく育成する
(高等学校) **英語で発信し議論する力の育成**

○CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合
(R7 : A2以上 51.8%、B1以上 18.7% ⇒ R8 : A2以上 54.0%、B1以上 24.0%)

目標

☒ 言語活動 ☐ 指導と評価の一体化 ☒ 教師の英語力・指導力 ☐ 校種間連携 ☐ ALTの参画 ☒ ICTの活用 ☒ AIの活用 ☐ その他
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

- ①生徒の英語力
CEFR B1以上の英語力を有する生徒の割合が増加。
(R6:14.3%⇒R7:18.7%)
- ②教師の英語力
CEFR C1以上の英語力を有した教師の割合が大幅に増加。
(R6:12.8%⇒R7:22.7%)
- ③教師の英語使用割合
発話の半分以上を英語で行う教師の割合が増加。
(R6:20.0%⇒R7:24.5%)

- ①CEFR A2以上英語力の生徒の割合
R5以降、52%前後で推移しており、それ以上の伸びが見られない。
(R5:51.0% R6:52.0% R7:51.8%)
- ②授業におけるICTの活用状況
R7調査では、録音・録画、人との文字でのやり取り、オンライン会話の全ての項目について、約6割の学校が全く行われていないと回答。

2. 要因分析

- ①CEFR B1以上の英語力を持つ生徒の育成について目標が共有され、個に対応した指導が行われた成果だと考えられる。
- ②教員採用試験における有資格者の優遇措置により、高い英語力を有した教員の割合が高まったため等と考えられる。
- ③各種研修会において授業における教師の英語使用および言語活動の重要性について周知し、それが実践されている成果と考えられる。

- ①CEFR A2以上の英語力を持つ生徒の育成について、特に専門高校において目標が共有されていないことや、個に対応した指導が十分ではないことが要因と考えられる。
- ②教員間におけるICT活用能力に差があることが考えられる。人との文字でのやり取りや、オンライン会話については、やり取りする相手の不在が考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ◎外国語指導助手等充実事業
- ①②外国語科（英語）における生徒の学習意欲を高める指導と評価に係る研修会
→評価基準の作成方法並びに生成AIを活用したライティング指導と評価の実践力を高める。
- ③①外国語指導助手（ALT）の指導力等向上研修会
→教科書を用いたワークショップ型スキル向上トレーニング研修を行い、チームティーチングにおける言語活動の推進と質の向上を図る。
- ①ネイティブスピーカーと過ごす中高生合同の英語での発信力養成チャレンジプログラム
→3日間にわたり中高生がALTと外部ネイティブスピーカーから「話すこと」の指導を受け、英語力とグローバルに活躍しようとする意欲を高める。
- ◎世界に羽ばたく人材育成事業
- ①グローバルリーダーズキャンパス
→米国スタンフォード大学と連携したオンライン授業。社会的な話題について講義やディスカッションを通し、高度な英語力とグローバルマインドの育成を図る。
- ①③①③各種海外派遣及び留学支援
→1年程度の留学支援、学校単位の海外派遣プログラム支援、韓国江原道の国際フォーラムへの派遣及びニュージーランド・クライストチャーチとの相互派遣プログラムを実施し、多様性への受容態度を育成し、実践的に英語を学ぶ機会を提供する。
- ◎その他
- ②③①②教育課程研究協議会
→学習指導要領の趣旨理解や、県英語教育の現状や課題についての情報提供、各校の英語教育の実践に係る情報交換を通し、指導と評価の改善につなげる。
- ③②小・中・高等学校の学びのつながりを見通した外国語の授業づくり研修会
→小・中・高等学校の英語担当教員が一堂に介し、生成AI活用モデル校による実践発表や、外部講師による生成AI活用についての講演を実施。
- ①③①②生成AIを活用した英語力向上事業
→生成AI教材を生徒が活用することにより、自己調整学習やオンライン国際交流をととして英語学習への意欲を高め、主に発信力の強化を図る。

鳥取県教育委員会

校種		2023		2024		2025		2026		2027	
		目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)		52	51	52	52	53	51.8	54	55	
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)		40	17.6	20	14.3	20	18.7	24	28	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合(%)		60	53.1	60	44.2	60		65	70	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合(%)		65	51.5	65	53.7	65		70	75	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	100	100	100		100		100	100	
		公表(%)	100	100	100		100		100	100	
		達成状況の把握(%)	60	45.5	60		60		65	70	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合(%)		99	99.1	100	100	100	99.1	100	100	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合(%)		50	32	40	20	40	24.5	45	50	

校種		2023		2024		2025		2026		2027	
		目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)		50	51	52	52.5	54	50	54	55	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合(%)		80	64.9	80		80		80	80	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合(%)		90	76.2	100		100		100	100	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	100	100	100		100		100	100	
		公表(%)	70	55.4	70		70		75	80	
		達成状況の把握(%)	70	57.1	70		70		75	80	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合(%)		40	40	43	40.2	45	49.4	50	50	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合(%)		75	67.9	75		75		80	80	

校種		2023		2024		2025		2026		2027	
		目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	90	77.3	90		100		100	100	
		公表(%)	50	49.6	70		60		65	70	
		達成状況の把握(%)	80	63.9	70		60		65	70	